

子どものやりとげる力を どのようにしてのばすか

保 林



一、子どもの達成への動機

子どもが或る問題場面に直面した場合、それをやり遂げる力は、その子どもの経験、知識、能力、技能、動機づけなどの総合されたものであろうが、なかでも困難なことをできるだけ早く上

手にやり遂げようとする動機―達成動機とよんでおく―は最も基本的な役割をはたすものであり、かかる動機なしには能力も技能もその力を十分に發揮することはできないであろう。もちろん、このような達成動機の背後には、自分を積極的に主張し、肯定し、自分を傷つけないようにしようとする自己実現、自己防衛の動機があると考えられるから、達成動機そのものが実は一種の複合的な動機であり、他人との関係で形成される二次的、社会的動機である。

我々は付属幼稚園の先生方に依頼して、

① リーダーになろうとする意欲、遊びや作業などで人よりうまくやろうという意欲

② 実際にリーダーになったり、他の子どもたちからの人気の程度。

③ 人のいいなりにならないで自分の主張を通したり、他人に頼らずに自分でやる程度。

の三つの観点から総合的に五段階評価してもらった結果を、後述する方法で直接園児の達成動機を測定した結果と対応させて比較したところ、極めて高い相関を認めることができた。即ち、先生から上記の三つの行動面で高く評価されたことは、我々の測定結果でも達成動機が高く、逆に先生から低く評価された子どもは達成動機の測定結果も低かったのである。

ところで、このような達成動機が旺盛であるかどうかは、その子どもの日常生活での経験量、とくに成功や満足を伴う経験の量に影響することが当然考えられる。自ら進んでやり遂げようとする意欲が強い子どもは成功する機会も多くなるし、リーダーの役割をはずす機会も多く、したがって要求不満を経験する度合も達成動機の弱い子どもに較べて少ないであろう。こうした経験量の違いや要求不満経験の違いが彼らの人格形成に及ぼす影響を我々は軽視するわけにはいかないのである。その意味で、とくに児童期までに如何にして達成動機の旺盛な子どもを育成するかは両親及び保育にたずさわる者にとって極めて重要な問題であると考えられる。

以下、我々が実施した調査結果を述べ、家庭での躰の留意点に言及してみよう。

二、子どもの達成動機と家庭の躰

米国の心理学者マクレランドは、子どもの達成動機の発達を規定する重要な要因として自律訓練が与えられた年齢及びその訓練時の賞讃や叱責による感情的要因の重要性を指摘したが、かかる要因をさらに具体的に検討するためにウインターボトムは、米国中西部の小都市で八才の少年とその母親を対象に子どもの達成動機と母親の躰との関係について一連の調査を行なっている。紙数の関係でその結果を紹介する余裕がないので、ここでは日米の比

較を行なう目的で実施した我々の同じ手続きによる結果を述べよう。

我々は先に触れたように付属幼稚園児を対象にT A T（絵を見せ、それを材料に作られた物語を分析するテスト形式である）を実施し、子どもたちが作った物語の分析から達成動機の高い子どもと低い子どもを選出した。他方、子どもたちの母親には、家庭での躰の態度をみるための調査用紙を配布して解答を求めた。その場合、「……しなさい」とか「……しましょう」といった積極的要求的な躰の態度と、「……してはいけません」といった否定的束縛的な態度の二通りの躰け態度が考えられるので、躰の項目をこの二形式で質問するようにし、合計四〇項目の質問を用意し、さらに子どもがそれらの躰の対象になつて行動をやった時、やらなかった時に与える賞罰についても質問した。質問項目の二、三を例示すると、

・積極的要求形式

- (1) ほかの子どもの言いなりにならず、自分の権利を主張する。
- (4) 母親や家の人に頼らないで新しいことを自分から進んでどしどしやる。

- (9) 食事の時、他のものに助けをもらわず自分で食べる。

- (16) 着る服を自分で決めたり、自分のお金の使い途は自分で決める。

・束縛形式

(1) 自分の主張を通そうとしてほかの子どもとけんかなどしない。

(4) 親の目のとどかない所で新しいことを自分でやるときは十分に気をつける。

(9) 食卓をよごしたり、手でつまんで食べたりしない。

(10) 自分のお金を持ったり、自分で勝手に使ったりしない。

質問に対する母親の躰の態度とその子どもの達成動機とを対応させてみて得られた結果は、

① 達成動機の低い子ども母親の方が高い子ども母親よりも幼ない年令（六才まで）での要求が多い。

② ところが年長（七才以後）になると、逆に達成動機の高い子どもの母親の方が要求が多くなる。

③ 達成動機の高い子ども母親の方が束縛形式の躰よりも積極的な要求形式の躰を多く課す傾向が見られる。

④ しかし、達成動機の高い子ども母親は、子どもが年長になるにつれ束縛形式の躰を多くする傾向がある。

⑤ 賞罰とも達成動機の低い子ども母親の方が多く、とくに頬ずりしたり、だきしめたりするような身体的な賞が多い。

⑥ 達成動機の低い子ども母親の方が、子どもの行動を高く評価する傾向がある。

このように達成動機の低い子ども母親は躰の要求も束縛も多く、しかもそれが六才以前の比較的幼ない年令で多いのに対し、達成動機の高い子ども母親の場合は、そうした要求や束縛を子どもが七才以後に、或る程度事態の弁別能力や判断力を示すようになってから多く課そうとする点が対照的である。しかも、ここで調査されたような躰の項目は、基礎的な生活習慣に較べてかなり高度な行為であることを考え合わせるとき、達成動機の低い子どもの母親の躰は、多分に子ども自身の発達の立場に立った躰というよりも、むしろ自分たちの立場を中心にした、いわゆるよい子への躰の傾向が強いことを認めないわけにはいかない。こうした母親たちは「こうしてはいけない」「ああしてはいけない」といった躰で幼ない子どもをいわゆるお行儀のよい子にしがちなのではなからうか。そのことは達成動機の低い子ども母親がよその子と比較して自分の子を高く評価する傾向が著しいという結果からもうかがえる。

また、幼ない年令で躰の要求が多いとすれば、子どもが母親の期待に添う行動をした場合、身体的な賞づけが多くなることは子どもが幼ないだけに当然考えられることである。

三、達成動機を育てる躰の留意点

以上に述べてきた調査結果は、人数も三〇名程度の少数であり、被調査家庭も社会的経済的に恵まれた一部の家庭に限られていた

のであるから、この結果から直ちに一般的な結論を導くことはもちろんできないけれども、旺盛な達成動機をうちにもつ子どもを育てるうえに望ましい躰のあり方について幾つかの示唆を与えてくれるには十分であろう。しかもそれらは何れも特別新しいものでも何んでもない。今までも、望ましい躰として指摘され強調されてきていることにほかならないのであるが、以下二、三の留意点を列記し説明しておこう。

(1) 子どもの自律性の躰は彼らの発達段階に即応したものでなければならぬ。

子どもの躰や訓練が彼ら自身、将来社会の有能な一員として生活していくために必要な基礎的動機や習慣の形成を目ざすものであるとすれば、当然子ども自身の発達の立場に応じた躰なり訓練でなければならぬ。単なる親のみえや世間、いからなされるべきものではない。程度の高い、言い換えれば子どものレディネスを越えた躰を幼ない子どもに要求する母親はどうしても束縛形式の躰が多くなるし、子ども自身はそれによって要求不満を経験する機会が多くなる。また、子どもの発達には個人差が著しいのだから、ほかの子どもとの比較よりも自分の子どもの発達の姿をよくみつめて、それに即応した程度の自律訓練をあせらずに行なうことが大切である。

(2) 子どもの自律性を躰けることが彼らのやりとげる力の動機面

での基盤を形成するうえに極めて重要であること、さらに同じ躰でも束縛的な形式よりも積極的・要求的な形式が望ましいことが既に考察したことから明らかであろう。このことは単に自律性の躰だけでなく躰全般について言えることである。我々は子どもに自分の玩具や本をきちんと整理することを躰けようとする場合、「散らかしてはいけません、かたづけなさい」と口やかましく言うよりも、「さあ整理して気持ちよくしましょう」と時にはいっしょになってかたづける方がはるかに効果的でもあり望ましいことを知らねはならない。

(3) 達成動機の旺盛な子どもを育てようと願うなら、正しい意味での躰がなされなければならない。正しい意味での躰とは、子どもを無理に型にはめこむことではない。子どもの中にあるものを伸ばし導くことによってひとりで望ましい型にはまっていくようにすることである。型にはめこむ躰にはいわゆるおしつけ、つめこみの傾向が強い。このような躰では、子どもの中にある自律性の芽ばえを伸ばすどころかつみとる結果に終わってしまう危険が多分にある。お行儀はよいが万事に消極的でおどおどして、ちょっとした困難にもすぐへこたれる子ども、他のものと協調し、リードしていけない子どもたちはこうした躰を受けて育った児の中に案外多いのである。

(京都学芸大学)